

引き揚げの思い出

大室 ふみゑ

50 年も前のことなので、地名の漢字や年月日など、記憶の薄れている部分がありますが、当時「満州*1」と呼ばれていた中国東北地方でのことを書いてみたいと思います。

昭和 20 年、母と私が入隊している弟に面会するために綏陽（すいよう）に行きましたが、演習のために面会できず帰って来た次の日のことでした。朝早くから飛行機の飛ぶ音が聞こえましたが、それは毎日のことなので、気にも止めませんでした。しかし、すでにその時、ソ連の飛行機が飛んでいたのです。それは後になって知りました。

私の住んでいた東安（トンアン）はソ連との国境だったのです。父は満鉄*2 に勤めていましたが、「9 時までに 3 食分の食事を用意して、水と着る物を少しもって駅に集合するように」との通告を受けました。私達はすぐにご飯を炊いておにぎりを作り、水筒に水をいれ、身のまわりのものを持てるだけ持って汽車に乗りました。私は出がけにアルバムから写真をはがして封筒に入れ、指輪やブローチ等の装身具と写真機と、夜着て寝るためと思って裕（あわせ）の着物を 2 枚程持ち帰りました。家を出るときに、留守中誰かが入って来て荒らされたら困ると思い、簞笥に太い釘を打って開かないようにしたり、私が女学校に入ったときお祝いに頂いた大きな藤娘の人形をシートで大切に包んで床の間において別れを惜しんだりしました。

私達はこの家に二度と帰れないとは思いませんでした。落ち着いたらまた帰ってくるのだと考えていました。しかし、後で聞いたことですが、私達が出た直後に暴動が起き、中国人が日本人住宅を襲い、略奪や暴行があり、駅で汽車を待つ日本人群衆が多数殺されたということでした。

私の家の隣は病院の院長さんでしたが、汽車もなく山の中を歩いて逃げる途中「もう歩けないからここに置いていってください。」と言うので、やむをえず置いてきたということでした。

また、近所のご主人は召集が来て軍隊に行くときに「自分の留守中に何か起きたときは、敵に辱めを受けないうちにこの短刀で死ね」と言って短刀を置いて行ったそうです。それで本当に子供 2 人を殺したのですが自分は死にきれず、皆と一緒に逃げたということでした。

4 年 4 か月住んだ国境の町東安は、私達が出た後は地獄だったそうです。今でも東安事件と言われています。

東安を出て牡丹江に着いて見たものは、蜂の巣のように穴のあいた貨車と、ホームに長く並べられたアンペラ*3 をかけられた死体でした。一般人を乗せて避難してくる貨車が、ソ連の飛行機に銃撃されて、乗っていた人は多数死んだのだそうです。

話を聞く時間もなくて私達の汽車は出発するということです。その時私は考えました。内地では金とか銀とか金物はみんな供出しているというのに、こんなもの持って死んだら非国民だと非難されるかもしれない。写真機もスパイと思われるかもしれない。いろいろなことで不安に思い、私は牡丹江の駅の線路の上に、そっと皆捨てました。そしてああ、それで大丈夫とホッとしたものでした。

穴のあいた貨車やアンペラに包まれた死体を見てからは、気持ちがすっかり変わり、本当にソ連と戦争が始まっているのだという緊張感がひしひしとわいてきました。牡丹江を出発

して新京（しんきょう）へ向かう車中は、皆口数も少なく思い思いに不安な気持ちをおさえていたようでした。

新京に従兄がいましたので、私達は下車して梅ヶ枝町という所に行きました。従兄は召集になって、いませんでした。がソ連参戦と同時に武装解除となり、帰って来ました。従兄は材木商を営み、家も家族も皆無事で家族5人に私達家族4人もお世話になり、9人の生活が始まりました。

新京の治安は割合良く、町の中も自由に歩け、中国人は悪意を持って日本人に接するという事も少なかったような気がします。

戦争は国と国とのことで一般大衆には関係ないよと言って近所の中国人も親切にしてくれました。やはり三千年の歴史を持った中国人の一面を見たような気がしました。そのうちに8月15日の終戦の日を迎えました。私達は揃って2階の屋上で陛下の放送を聞きました。重苦しく、鉛が胸に落ちてきたような気がして、ただ茫然としてへたへたと座りこんでしまいました。「ああ、やはり」という気持ちもありました。

その時一番先に頭に浮かんだのは、開戦の前日母と2人で面会に行行って会えなかった弟2人の安否でした。陣地の近くにはソ連の戦車が攻めてきた時に爆弾を持って入る「タコ壺」という穴が掘ってありました。もしかして、その中に入って…などと不吉なことが次から次へと頭に浮かびました。あの日、母と駅に來た時に1人の男の人が汽車から降りてきました。「どこへ行くのですか」と尋ねたら「召集になりましたね…」と言ってさびしい後姿を見せながら兵舎の方に歩いていきました。その次の日が開戦です。あの人はどうなったかなあ、と今でも思い出します。シベリアへ捕虜として連行されたのでしょうか。

私の弟は2人ともシベリアに連れて行かれて病死しました。上の弟は幹部候補生、下の弟は学徒出陣でまだ少年でした。でも、家を出るときには「では行きます」と言うのです。行ってきます、とは言わないのです。顔を見たら「もう帰れないと思うからね」と言いました。私達も一瞬無言でしたが「では、からだに気をつけてね」と言って涙で別れました。あの兵隊さんもたった1日の入営で戦死したのでしょうか。

終戦の放送を聞いてからは、夜は燈火管制の暗幕もいらず、明るい夜を過ごすことができるようになりました。

新京の街もだんだん様子が変わってきて、日本人が吉野町の大道で道端に自分の持ち物を並べて売ったり、中国人が主に日本人の着物などをたくさん肩にかけて売ったりしていました。私も家に小豆やもち米がたくさんあったので、従妹と一緒におはぎを作って売りました。テントで小屋を作ってもらい、家からテーブルを運んで来て、ニコニコ屋という屋号をつけてやりました。食べ物に餓えていたので、作っただけすぐ売れました。

街に出てみますと、いろいろなものを目にしました。日本の軍人の姿は全く見当らず、それに代わってソ連兵がぞろぞろ歩いていました。その中には女の兵隊がいるので珍しく思いました。ソ連兵が進駐して來たばかりの頃は、見当たり次第に「ダワイ、ダワイ（よこせ、とかくれとかいう意味）」と言って時計や万年筆、ライターなどを取り上げたそうです。奥地の方から逃げてきた女の人を頭を丸ぼうずにして、男の人の服を着て変装している人もいました。でも、新京では略奪や婦女暴行の話は聞きませんでした。

奥地から避難民となって逃げてきた一般の人や開拓団*4の人や、義勇隊*5の少年の姿は本当に見るに耐えないものでした。男の人はほとんど兵隊に行ってしまう、女と子供が防空頭巾をかぶり、ボロボロに汚れた服を着て梅ヶ枝小学校に集まっていたいました。腰に下げた缶詰

の空き缶で水を飲んだり、食事をしたりしたのだそうです。8月でしたので畠にあるものや山に生えているものなど、なんでも食べて生きて来たと言っていました。また、子供が泣くと中国人に見つかって皆に迷惑がかかると言われて、泣く泣く子供を置いて来たと言う話も聞きました。小学校で母親が死んでしまい乳飲み子はその胸に縋がって泣いているのを、私も涙して見ました。

寒くなってからは朝早く馬車に死んだ人をたくさん積んで、どこへともなく運ぶのを見た人もあるそうです。避難民の生活は本当にこの世の地獄絵でした。私達も少年義勇隊の人や難民の人を店に呼び入れて、おはぎを上げたことがありました。出生地や今まで暮らしていた所や、避難してくる途中の苦労話などを涙ながらに話していました。また、少年達の内地の家では親や兄弟もあるでしょうにと思って、自分の弟のことも思い、他人とは思われませんでした。

年が明けて昭和24年に引き揚げの話があり、9月に葫蘆（コロ）島から佐世保に帰ってきました。昭和8年に父の満鉄入社によって満州にわたり、母と私達は大連に残り、任地の牡丹江に行った父とはしばらく別居生活が続きました。満州建国の時代でいろいろなことがありましたが、第二次世界大戦の時期を満州で過ごし、終戦を迎えて日本に帰ってきました。

* * * * *

中国残留孤児の方を見ると、その複雑な御立場に深く同情します。と同時に敵国人であった日本の子供を育ててくださった中国の人を尊敬したいと思います。私達が葫蘆島から乗船するとき、港に大きな横断幕が張られてあり、中国語なのでよくわかりませんが、「同じ人種で、同じ文字を持つ友達の皆さん、お元気で祖国にお帰りください」という意味のことが書いてありました。

もう二度と行くことのない中国ですけれど、戦争という不幸を乗り越えて、平和な時代の続くことを祈っております。

（おおむろ ふみえ 大正10年生まれ）

***1 満州（満州国）** 満州事変をきっかけに日本が中国東北部に建国した国。満州を占領した関東軍が清朝最後の皇帝溥儀（ふぎ）を執政として昭和7年、独立を宣言した。昭和9年には溥儀を皇帝として帝政をしき、昭和20年まで存続した。

***2 満鉄** 南満州鉄道株式会社。明治39年に設立され、満州経営の中心となった特殊会社。ポーツマス条約でロシアから得た長春以南の東支鉄道ほか支線とその付属地及び撫順炭田、鞍山製鉄所の管理にあたり、ことに満州事変後は諸事業を通して満州の植民地化に重要な役割を果たした。半官半民の会社で、初代総裁には後藤新平が就任し、昭和21年まで存続した。

***3 アンペラ** むしろのこと。または、カヤツリ草科の多年草。茎の繊維が強く、干して平らにしてむしろや袋などを作る。

***4 開拓団** 満州への農業移民政策として、また対ソ防衛強化のために計画され、一般開拓団と義勇開拓団とが入植した。その入植地は、関東軍、満州国の政府機関、半官半民の満州拓殖公社によって、中国人や朝鮮人からきわめて安い値段で強制収容されたものであった。

***5 義勇隊・少年義勇隊** 昭和 18 年に創設されて満州へわたった満蒙開拓青少年義勇隊が、3 年の訓練を終えると、義勇隊開拓団へ移行する仕組みになっていた。満蒙開拓青少年義勇隊の応募資格者は、数え年 16 歳（早生まれは 15 歳）から 19 歳までの者とされた。